

第十四号

対談

「中島靖子×奥田雅楽之一」

「祖母から孫へ伝えたいこと」(下)



先月、今月と、メルマガ noichi 読者の皆様には、特集号をお送りしています。

対談『中島靖子×奥田雅楽之一』「祖母から孫へ伝えたいこと」。

今月は下の巻となります。

今回、対談をさせて頂いて改めて思ったことがあります。それは、半世紀以上も歳が離れている祖母と私の間柄に、祖母と孫、師匠と弟子という以外、何かもう一つの言葉にならない不思議な関係があるのでは…ということ。例えば初代家元・中島雅楽之都に対する想い、正派のこと、芸のこと、人間関係のこと、家族のこと、どんな話になっても私達は本音で言い合えて、本気で聞き合える為の空気感みたいなものが常に漂っています。

人間関係には、当人同士ではどうすることも出来ない二つの摂理、『縁』と『相性』があると思います。生きている限りこの『縁』と『相性』は、どうしても付きまとってしまいます。それは親しい間柄の家族だからといって逃れられる問題でなく、家族間にもやはり『縁』と『相性』は存在するというのが、私の考え方。縁がなければ会えないし、相性がよくなければ折り合えないのは人間である以上、どこの家族も同じことだと思っています。

縁があつて、相性がよい。それが決して不変のものでなかったとしても、その時、その瞬間に本気で向き合える二人の関係は、もはや理屈を越えて、世の中に+（プラス）を生んでくるのだと、いつも私は信じています。

奥田雅楽之一

メルマガ noichi 第十四号特集号は、先月号の続き。

対談『中島靖子×奥田雅楽之一』「祖母から孫へ伝えたいこと」(下)となります。

一大流派の長としての、その重たい責任を30年以上も背負ってきた正派家元。

今回の対談を通じ、中島先生から貴重なお言葉を沢山頂くことができました。

先生、いつまでもお元気でいらして下さい。有難うございました。

『アメリカ留学』

雅楽之一…アメリカにいらしたのは昭和の何年くらいですか？

中島…27年じゃないかしら。

雅楽之一…どのくらい長く？

中島…2年です。2年間カレッジに行つて、卒業して帰ってきました。

雅楽之一…御留学はどんな体験でしたか？

中島…その2年があつて、私はとってもよかつたと思うんです。というのも、戦後、割に順調に進みすぎたと思ひますか、リサイタルをさせてもらつたり、自分の合奏団を作つたりして。子供の頃から人に囲まれて育つた私みたいな人間には、アメリカでの経験は必要な苦労だったんです。音楽的な観点で考えてみても、ほら、時代とともに会場がどんどん大きくなるでしょ？ 今までとは違う訓練をした、あとは理論的な備えね。俗に言う西洋音楽の知識がみんなに身に付かない限り、ただ楽器を弾いてもいい音楽にならないと思うようになったので、そういったことに気が付かせてくれたのも、アメリカでの貴重な経験があつたからだったと思います。

雅楽之一…当時、アメリカには船で行かれたんですか？

中島…行く時は父に連れて行つてもらつたから飛行機で。帰りは船でした。

雅楽之一…楽器はどうしたんですか？

中島…持つて行きました。箏響台（せうきょうだい）（中島靖子が考案に携わつた、箏のボリュームを上げる台）と一緒に。父と私はパサデナであつたミュージックオリンピアドという会議に出席したんです。その時行く前に弾いてた平井（康三郎）先生の作品、箏とピアノのコンチェルトを持ち曲にして行つて、向こうのピアニストの人とご一緒しました。

雅楽之一…パサデナですか？

中島…パサデナ。カリフォルニア州の。その時に、脇田佳代子さんという友人と出会いました。

雅楽之一…前に読んだ記録の中に、指揮者で巨匠のアルトウーロ・トスカニーニと接点があつたという風に。それはどこでの話ですか？

中島…ニューヨーク。ニューヨークフィルのリハーサルを聞きに行く機会があつて。

雅楽之一…それは初代家元と一緒に？

中島…そうです。その時の指揮者がトスカニーニでした。今思えば凄いいことよね。その中のセカンドヴァイオリンのトップの方が禅を修業してる方で、その方が親切で、いつでも自分のスタジオを勝手に使つて、冷蔵庫も勝手に開けて食べて練習しなさいと言つて下さつて、助かりました。初対面なんですよ。

雅楽之一…冷蔵庫を（笑）

中島…そのおかげで、勉強できたんですよ。やっぱり外国でしょ？ 何もかもが違う環境の中に禅の心得がある方がいらしたというのは、私達も安心でした。

雅楽之一…アメリカから帰つていらして、いよいよ唯是震一と出会い、縁があつてご結婚されます。

中島…はい。

雅楽之一…それからの人生、それまでとは全く変わりますか？

中島…そうですね（笑）

雅楽之一…（笑）

中島…でも一番初めに唯是に会つたのは、多分、宮城先生が、「ソプラノ歌手の（フランシス）カサードさんの方が、箏響台を見に正派へ行きたいとおっしゃつたので、そちらへ伺いたい」とご連絡がありまして、その通訳として付いて来られたのが唯是でした。その時すでに有名になっていた「神仙調舞曲」を作曲した人っていうのは、私も知つてました。

雅楽之一…日本での接点は、それまで全然なかつたんですか？

中島…なかつたです。

雅楽之一…そうですね、不思議ですね。

中島…チラツとは見えましたけどね。名前も聞いてたし、唯是が音楽学校に入つてきた時には結構話題の人で「あの人が唯是震一よ」とかつてみんなが言つて、ああそんなのか、と。将校ズボンなんか履いて、みんな黒い背広の中で一人違う格好で来たのは覚えてますね。

雅楽之一…ハエ、想像が付きませぬね。

中島…でも、私がアメリカ行つてる時、一年たつてちょうど唯是がアメリカに行った時に、ロサンゼルスに寄つて、そこで久しぶりに会つたの。



撮影日時：2012年6月6日 場所：霞山会館『鹿鳴の間』 取材協力：霞山会館



雅楽之一…お二人の共通点、恩師の宮城道雄先生と、アメリカ留学が結んだ不思議なご縁だったのかもしれないね。

中島…そうかもしれないわね。

『先輩・同輩』

雅楽之一…話を変えますが、近い年代の方で、演奏の面、或いはそれ以外の面で影響を受けた先輩はどなたかいらっしゃいますか？

中島…それは、他派の先生方と一緒に舞台とかテレビとかに出して頂けるようになって、もちろん宮城喜代子先生も（宮城）数江先生もちゃんと生徒扱いをしてくださって、注

意してくださいました。（初代）野坂操壽先生。（初代）米川敏子先生方とは、一緒に弾かせていただくことで勉強になりました。本当に素敵な演奏をなさる方でした。それに、演奏家というのは一人一人違うのよ。だから、その時のトップの方の動きを覚えることが、それがそのままお稽古していただくのと同じくらい、或いはそれ以上の勉強をさせて頂けたのかもしれない。それぞれ違った個性でいらしたけど、思い返してみますと、本当にすごい演奏家の方々のお側にいました。

雅楽之二では、ジャンルを変えて、洋楽ではどうでしょう？

中島…あ、それは沢山いらつしやるけれど…洋楽の方では、私はずっと内田るり子さんって方、この方は日本歌曲に一生懸命だった方ですから、それから年代も近かったのでも非常にいい友達でしたし。それから、一まわり違ったのですが、邦楽の方ですけど平井澄子さんが芸大の時の同級生で、父とも気があって正派音楽院に教えに来てくださったので、あの方とは、とても良いお友達になってね。

雅楽之一…そうですね。ありがとうございます。では次に、少し、御自身の作品についてお聞かせ下さい。代表作の一つでもある「笛吹き女」。あれは、やはり平井康三郎先生に作曲をご師事されたというのとは別に、この箏曲の世界に生まれたから作れたという新しい形での…

中島…そう。あれはね、むしろ平井先生から離れたって、離れたって言うのは変なんですけど、いわゆる西洋音楽から離れて作った最初の曲です。作曲の前に、その頃出来たNHK邦楽技能者育成会に行きましてね。あの時代は特に邦楽の世界は横の繋がりがなかったんですね。でも育成会や大学では同じクラスの中に色んなジャンルの人がいて、邦楽の世界にもこんなに色んな表現があって、こんなに色々な歌い方があって、今までの長調か短調かだけじゃないっていうことがわかったのが「笛吹き女」誕生のきっかけだと思えます。でも私は、作曲の本当に入口しか勉強してないから…それで精一杯でした。

かけたと思えます。でも私は、作曲の本当に入口しか勉強してないから…それで精一杯でした。

雅楽之一…ありがとうございます。あの、演奏家としてのこともお尋ねしようと思います。では、あえてご自身が作られた曲は外して、と前置き致しますが、古典で特別好きな曲ってありますか？

中島…ん、私はやっぱり「六段」が好きかな。

雅楽之一…理由は？

中島…「六段の調」を弾くと私はとってもスッキリするんです（笑）

雅楽之一…スッキリする。分かりやすい表現です。

中島…そう？

雅楽之一…ええ、同じ次元かどうか分かりませんが、私も同じことを感じます。それから、正派の会員からよく聞く事なんですけど。靖子先生は衛藤（公雄）先生の作品がお好きなんじゃないかって。

中島…あ！好きです。

雅楽之一…やはり。

中島…それはね！音！箏の音に色があるっていうことを、衛藤さんの演奏で、私凄く感じました。厳しくきちっとした演奏を学校でも勉強したし、また、宮城先生が持つておられる色というのもありましたが、又違う色合いって言うのが衛藤さんの音にはあつて。

雅楽之一…なるほど、衛藤先生も宮城先生のご門下でいらつしやいますもんね。

中島…はい。そうですね。そういう共通点の他に、何ていうのかな、彼には鋭さって言うより、ふくよかさって言うのかな。衛藤さんの曲は長音階・短音階の約束のものをきちんと生かしてらつしやるんだけど、それでいながら箏として弾き難くないテクニクなんですよ。出てくると厚みがあるんだけど。個々のテクニクが箏で弾き易いんです。

雅楽之一…なるほど

中島…衛藤さんの音が…ん、ふくよかさって言う他難しいわね…

雅楽之二…それは、衛藤先生のご演奏が、お人柄を映し出す、あたたかい音だったって言うことですか？

中島…はい、そうですね。それと、面白い先生でね。ウチの隣町、西国分寺にいらっしやっ

て。ある日、先生の所へ何年ぶりに尋ねたんです。そしたら先生が「駅に迎えに行くから」とおっ

しやっ。駅に着いたら、車椅子が二つ用意してありました。先生

が一つ乗ってらして、「靖子さんもこれに乗りましょう」って。も

う一つの車椅子に私が乗ると、お弟子さんが押してくれて、その時

に先生がね「月の〜♪砂漠を〜♪」って(笑)

雅楽之一…(笑) 楽しい方だったんですね。

中島…楽しかったです！

雅楽之一…衛藤先生に関しては、僕も一つ思い出があるんです。確

か僕が子供の頃、十七弦を最初に触ったのは、ゲスト出演の衛藤先生のお隣だったと思うんですけ

ど。
中島…うん。そうだったわね。

雅楽之一…何の演奏会かわからないんですけど、正派の記念の大きな演奏会だったと思います。それで、下合わせで先生が正派会館にみえた時に、厳しかった私の母が「もし

お目の不自由な先生がいらしたときは、必ず手を取ってご挨拶をするように」を徹底してまして、子供の私は、玄関

にお見えの先生の所へ駆けていって、お手を取りました。そしたら先生の手が大きくて…

中島…ええ。衛藤さんの手は大きいわ(笑)

雅楽之一…先生が十七弦をお上手だったって言うのは、もう色んな人から聞くんですけれど、僕はいつもその先生の手

が大きかったという記憶と、十七弦という楽器が何となく結びつくんですね。

中島…そうなんです。あのふくよかさが。やっぱり十七弦というのは、私は、箏でなくて洋楽

でいえばチェロとか、ベースの役目、だから音色をあんまりコ

ト的に思わない方が十七弦の効果があるんじゃないかと思うんです。

雅楽之一…作曲家として、演奏家として少しお聞きしてきましたが、音楽家としてのこれから、何かこんな活動、或いは、こんなことをやっていきたいという願望はございますか？ここでは

家元というのはお忘れ頂いて、あくまで音楽家としてです。

中島…私のこれから？

雅楽之一…はい、そうですね。

中島…ん、それはまだ力があれば、今の自分に書ける力でいいから、一曲でも二曲でも…曲を作りたいと思うけ

れども。

雅楽之一…そうですね。それなら、個人的に思うことを申し上げます。是非、『中島靖子作品演奏会』を。これは一度何処かでやって頂いた方が良いと思いますね。

中島…あらそう？

雅楽之一…やはり、これだけ演奏家が揃っていますから。それに、中島靖子作品と正派の芸風は、同じ方角を向いていると思うんです。

中島…あくなるほどね。

雅楽之一…ご自身で曲を選んで、ご自身で相応しい演奏家を選んで…それをおやりになったらお弟子さん方、引いては会員はとも喜んでくれるんじゃないかと。だいぶこれは個人の意見ですが。

中島…有難う。考えてもいなかったです。

『これからの邦楽界』

雅楽之一…では、話を少し大きくしていきますが、これからの邦楽界について。色々と今邦楽界が人口の減少に伴って、或いは、日本の経済低迷に伴って、余り上向きな話を聞かなくなってきた昨今の邦楽界ですが、何かこれからの邦楽界、こういう風にあって欲しい。何かそういう風な願いはありますか？

中島…私は特に変わったことでなくて、やっぱり、正派の生き方がそうなんですけれど、専門家っていうのは大切だけど、やっぱりその楽器に触れる人が多くならないと、この楽器と共にその音楽が伝わっていかないと、思うんですよ。

だから、決して専門家だけがKOTOIST(コトイスト)でなくて、どんな立場の人でも、そう思える環境になってほしいわ。

雅楽之一…ご尤も。

中島…箏を勉強している人たちがもうちょっと沢山になっ

て、機会があったら子供たちにも…ま、子供たちもね、この頃よく教えにいつてるのを聞いていると、凄く子供達生き生きと弾いているし、何かそういう、子供達同士で合奏の喜びみたいなことを感じ合えればいいと思うわ。子供達もきちんと教えると、相手を聴きながら感じながら弾けるようになります。そういう子供は子供同士、沢山で勉強していくチャンスっていうのは必要ね。やっぱり個人のお稽古はお稽古で大事だけれども、それと同時に合奏があった方がいいんじゃないかと思えますね。

『おまけ』

雅楽之一…本当に、何でも快くお答え頂いて、ありがとうございます。とても為になるお言葉を沢山頂きました。では、最後にもう一つだけ質問させて下さい。これを聞かない訳にはいかないのです。

中島…はい、なんですか？

雅楽之一…これからの雅楽之一。

中島…あら、雅楽之一さん？

雅楽之一…一応、編集部からは出来るだけ厳しいご意見をお願いしますと言われてきました。沢山ご不満があるとは存じますけれども(笑) 僕が言うとう自虐的で少し気持ち悪いですが、忌憚のないところで、おっしゃって下さい。

中島…あー(笑) 雅楽之一さんに私が

要求することは、…

雅楽之一…はい。

中島…いいのかな？

雅楽之一…はい、何でもどうぞ(笑) なんか怖いですね(汗)

中島…えーとね。一生懸命になった時

に…いいの？

雅楽之一…どうぞ(汗) 何でもどうぞ(笑) いざとなったら編集でどうにでもなりますから(笑)

中島…あの、演奏のこと。拍とリズムなんですよ。いつもアナタに言っていることだけど、特に、気持ちが高揚して聞かせてくる時に、私はね、どんなに節が盛り上がりつつもそこにあるこのリズム、イチと、ニイとの、『ト』の拍ね。音があるとこもないことも、それは、拍が安定してることごとくでも大事で、拍が不安定になって、リズムが先行しちゃうといけない、それと言うのは、アナタの表現することへの想いが強すぎるんだと思うんです。だから、その想いの中で、きつとそこに聞こえていない拍をいつも感じるようになったら、あとはアナタの努力次第で、きつと、いい演奏家になると思います。

雅楽之一…ありがとうございます。あのー、そのお言葉、そのまま載せたいと思います。あはは。

編集部…演奏以外のこととかありませんか？

雅楽之一…(ドキッ)

中島…演奏以外？ 演奏以外はい

い子です。

中島・雅楽之一…(笑)

中島…ま…。この子はいいい子です。

雅楽之一…これで以上です。有難うございました。

中島…いえいえ。こちらこそ、こ

んなおしゃべりをする機会を作っ

てくれて、どうもありがとうございます。

嬉しかったわ。



◎あともがき◎

バッハやモーツァルトなど著名な作曲家の音楽は、映画、コミック、果ては喫茶店のBGMにまでさんざん使われているため、せつかくの名曲に手あかがついてしまっている場合が多い。「六段の調」も同じく、名曲であるがために日本料理屋などで環境音楽として使われて、俗なイメージが定着してしまっているのかもしれない。

頭をまっさらにして改めて「六段の調」を聞いてみる。どこかバッハと通じるものがある気がして調べてみると、八橋検校が亡くなった1685年にバッハが生まれていた。八橋検校の影響がバッハにあったなどと言うつもりはもちろんないけれど、地理的に離れていても同時代の感覚というの、いつの世の中でもあるはずだ。

「六段の調」をRokudan-variationsとして聞いてみたら、また違った名曲として聞こえてくるのかもしれない。

グラフィックデザイナー @mp : <http://www.1938.jp> みやはらたかお